

人びとの戦後経済秘史

表題は8月に岩波書店から刊行された東京新聞・中日新聞経済部編、日本経済「記憶遺産」の記録。表紙カバー裏から一短期間で奇跡的な成長を果たし、世界史的にも極めてユニークな戦後の日本経済。その激動の時代に人びとは何を感じ、どう生きたのか。本書では、戦後史を生きてきた人びとの証言を丹念に収集し、歴史に埋もれたドラマを発掘。為政者目線に陥りがちな「正史」に対し、普通的生活者の実感にも迫る。戦後の経済史と同時に民衆の生活史も俯瞰できる一冊。



話は戦時中の国家総動員経済の真相から始まる。「ドングリから戦闘機燃料を」といった、勝ち目のなかった対米開戦、国民をだますテクニックなど。戦後の混沌から高度経済成長へと続くが、光とともに公害など影の部分も。

そしてオイルショックと「老いるショック」、バブルからバブル崩壊へと、行き詰まる豊かな社会。「歴史の荒波を乗り越えて来た人びとの不屈の精神。その貴重な証言の数々から、日本経済閉塞の起源と再生へのヒントが浮かび上がる。」

心に残った貴重な証言は多いが、本書を執筆した記者の感想の一部を紹介しておく。戦前の日本では、日露戦争に日本が勝利して以降、社会の方向がおかしくなったといわれる。奇跡と言われた日露戦争の成功体験ゆえに軍隊が肥大化し、やがて無謀な第二次世界大戦に突入する誤りを冒す。

戦後の日本はやはり、奇跡と言われる「高度経済成長」の成功体験が強烈だったがゆえに、企業中心の社会になりすぎ、本来必要な社会システムの構築ができないままになっていることを痛感する。--- 戦後経済史に、新たな「章」を開くことができるかはわたしたち自身にかかっているのを強く感じる。

渥美龍太郎記者は自分の会社が公害を出しているのを知りながら内部の人びとは声を上げられなかったのか探った(第三章)。当事者の一人が「日本人は空気に流されてしまう」と漏らしたのが印象的だった。「いまも相次ぐ企業不祥事は、個人が組織の意向を過剰に忖度する日本人特有の感覚が原因ではないか。「異端」を受け入れる風土を築かなければ、悲劇はまたいつでも起こる」と感じた。

第三章の昭和四日市石油元社員で内部告発した中西安弘の証言。「明らかに悲惨なことが起きていても、辞めなきゃ私だって口に出せなかった。それが社内の空気だった」戦争も公害も組織内部では多くの人が「おかしい」と思いながら破局に向け突き進んでしまった。福島原発事故も同じ構図だ。「人間は本当に変わることができるのか」。同社役員秘書だった成井透は今も疑っている。

(2016年11月19日)